

指定校番号	28000	学級活動	児童会・生徒会活動	○	学校行事	別紙様式
-------	-------	------	-----------	---	------	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	熊野第四小学校	校長	吉田浩一	生徒指導主事	佐伯房代
-----	---------	----	------	--------	------

取組事例名 『児童委員会のあいさつ運動へ』

取組のねらい 『キーワード 教師主導からの脱皮』

熊野町では、小中学校連携して6つの行動スキルの「がん熊スキル」を身に付けさせようとしている。「大きな声であいさつをしよう」はその一つである。これまでは教師主導で進めてきたが、今年度は、児童が主体的に「あいさつをする」よう取り組んだ。



取組の具体的内容 『キーワード 児童の主体性』

・自分のあいさつの様子の振り返り、あいさつを以前よりしていないこと、声が小さくなっていることに気づかせる。【学校評価児童アンケート

「レベル5のあいさつ」前年度5月肯定的評価83.3%⇒今年度5月肯定的評価78.7%】

・一部の地域の人から「熊四小の子どものあいさつの声が小さくなっているね」と言われたことを知らせる。

・児童委員会は、振り返りや地域の人たちの言葉を受けて、朝のあいさつ運動を実施することを決め、分担を決めて、あいさつ運動を始めた。

・児童委員会の児童が朝会であいさつのモデルを示す。【「自分から・立ち止って・相手を見て」「あいさつをして」「お辞儀をする」】

・6年生の「あいさつやります！宣言」クラスが主体的にあいさつ運動を行った。



あいさつ運動について

児童委員会担当 齋藤 出野

- ねらい ○児童委員会主催のあいさつ運動を通して、大きな声であいさつのできる顔こずを目指す。
(自尊)
○熊四小文化の日、見に来てくださる保護者や地域の方々へ大きな声で感謝の気持ちを伝える。
(他尊)
- 日時 10月13・19・26日(水) 7:40~8:00
- 場所 正門前(雨天の場合 1F 脱靴場)
- 構成 児童委員会5年生4名・各学級の代表2名ずつ26名(特別支援学級の児童は交流学級で) 合計30名
- 日程
10月11日(火) 全校朝会で児童委員会の5年生が「あいさつ運動」について説明する。
各学級のあいさつ運動の代表者を決定する。
10月13日(水) 第1回あいさつ運動(各学級の代表)
10月13日・19日・26日(水) あいさつ運動(・・・11月以降に続く。)
- 当番表

日時	メンバー	
10月13日(水)		
10月19日(水)		
10月26日(水)		

- その他
○ 9月初めに児童委員会で実施したあいさつ運動で、全体的にあいさつの声が小さいことに気づいた児童たちからあいさつ運動をしようという声が出た。児童主体での「あいさつ運動」は初めての取り組みではあるので、改良を加えながら11月以降も実施していく。



取組の課題・創意工夫『キーワード プラス評価』

・児童委員会は各学年のあいさつ名人にあいさつのコツやあいさつをした時の気持ちをインタビューし、あいさつした時の気持ちよさを給食時の放送で伝えた。

3年生のあいさつ名人に選ばれた男子からは、あいさつのコツとして「恥ずかしがらず、元気よく挨拶をする」こと、あいさつをしたとき、「心が温まるし、気持ちがよくなる」こと、あいさつをされたら、「うれしくなって知らない人でも友だちになった」との発表があった。

・「気持ちのいいあいさつができていますね。」などといった来校者の評価を児童に伝えるようにした。



取組の成果（効果）『キーワード よさを広める』

・各学年のあいさつ名人からの放送では、児童のあいさつに対する目的意識や相手意識を高めることができた。放送を聞いたのち、あいさつするときのコツを生かす児童が出てきた。

・帰りの会で、自分のあいさつを振り返り、自分のあいさつがよくできたことを自己評価できた。

・今年度の学校評価アンケートの「レベル5のあいさつ」に関する児童の肯定的評価は、5月78.7%⇒1月76.5%と、一定数を保っている。一方、職員の肯定的評価は、5月33.3%⇒1月66.7%と大幅に増加している。児童の意識レベルはほとんど変化していないが、職員の評価が上がっていることから、児童のあいさつの質の高まりがあったととらえることができる。

今後の展開『キーワード 引き継ぎ』

・児童委員会の6年生から5年生に「あいさつ運動」の引き継ぎをする。

他校へのアドバイス『キーワード 気づきの場づくり』

・教師が設定した「あいさつ運動」から、児童主体の「あいさつ運動」への転換を目指すために、児童に自分のあいさつの実際はどうなっているか振り返り、気づかせるための場づくりが必要である。

